ヤコブ2章14〜26節「信仰を見せる」

ヤコブは信仰生活の具体的な実践を教え、勧めています。2章の前半では、信仰が行いとなって表れる一つの具体的な事柄として、人をえこひいきすることがあってはならない、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を守るようにと勧めました。そのように信仰と行いはつながっているのですが、ヤコブは教会の中に、信仰と行いがつながっていない現実があること、あるいは信仰と行いを分けて考える考え方があることを感じていたのでしょう。そのことを憂慮して、続けて書いていきます。

１．行いの伴わない信仰（：14〜18）

14〜16節。原語では、14節の初めと16節の終わりが「何の役に立つでしょう」で閉じられているような構造になっていて、その間で語られていることについて問いかけています。その問いの答えは「何の役にも立たない」です。具体的には、自分には信仰があると言っている人に、信仰を表す行いがないということです。貧しく飢えている兄弟姉妹に対して気遣うことばをかけるけれども、実際に必要な物を与えないなら何の役にも立ちません。

17節。役に立たないどころか、「死んだもの」だと言われます。信仰にいのちがありません。何の結果ももたらさないのです。14節で言っているように、その人を救うことができません。

この指摘は厳しいものです。私たちも心刺される思いになるのではないでしょうか。困っている人々のことを聞いて、祈りますと言い、実際に祈りますけれども、具体的な助けを行わないなら、それは死んだ信仰だというのです。

そんな何の役にも立たない信仰者の態度に対して、ヤコブは「行いによって、自分の信仰を」見せると言います。18節。信仰をどう見せるかが問われています。私たちは信仰をどう見せるでしょうか。まずは信仰告白によって自分の信仰を明らかにします。それは大切なことです。しかし、それだけでなく、生活の中でもっと見える行いにすることができるでしょう、とここでは問いかけられています。

私たちの生活の中で、信仰が行いになって見えるようになっていないとしたら、信仰が生きていないのかもしれません。そのように自分を顧みるように迫られています。それぞれが行いによって自分の信仰を見せると決意することが大事でしょう。

２．信仰と行いの関係を教える例（：19〜26）

さらにヤコブは信仰と行いの関係を教えるために、例を挙げていきます。行いによって信仰を確認することができる例として、三つのことを挙げています。

第一に挙げられているのは悪霊のことです。もちろんこれは反対の事例として挙げられています。

19節。キリスト者は唯一のまことの神を信じています。本当の信仰には二つの要素があります。それは知識と信頼です。唯一の神、また救い主イエスのことを知り、そして信頼することが本当の信仰です。

悪霊どもは、神のこと、イエス・キリストのことをよく知っています。その上で恐怖に震えています。確かに行動が伴っていますが、それは信頼するのとは全く違います。ふさわしい行いを伴っていないのであれば、本来のあるべき信仰ではありません。20節。

第二と第三に挙げられるのは、二つとも模範とすべき例で、旧約聖書からの例です。第二に挙げられているのはアブラハムのことです。

21節。アブラハムがイサクを祭壇に献げた「行いによって義と認められた」と言っています。でも、その行いはアブラハムの信仰が見えるように表されたことだと言います。

22 節。アブラハムの行いとともに彼の信仰が働いており、その行いにおいて信仰が完成されたと言います。と言うのは、イサクを献げる行いとなる以前に、アブラハムの信仰が明らかにされていたからです。

23節。神、主がアブラハムに夜空の星を見上げさせ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われました。その時、アブラハムにはまだ子どもがいませんでした。しかし、彼は主を信じました。それが彼の義と認めら

れたのです。その後、アブラハムが 100 歳の時にイサクが与えられました。そのイサクが成長したときに、彼を献げるようにと主が仰せられたのです。それでもアブラハムは、子孫が星のように数多くなるという主の約束を信じており、「神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考え」（ヘブル 11：19）て、ひとり子イサクを献げようとしたのです。その神に従う行いによってアブラハムの主に対する信頼が表され、それゆえに、彼は神の友と呼ばれました。

24 節。アブラハムの場合、イサクを献げる行いに彼の信仰が表され、長い信仰の歩みの末に信仰が行いとなって表されたのです。その意味で、「信仰だけによるのではないことが分かるでしょう」と言っています。信仰が行いによって表されたということです。行いによって信仰が生きていることを証ししたということなのです。

第三に挙げられているのは遊女ラハブのことです。

25 節。この遊女ラハブはヨシュア記の初めに登場します。エリコの町に住んでいました。ヨシュアが町を偵察するために遣わした二人の者たちを彼女はかくまいました。そして彼女は二人に言いました。イスラエルの神、主がイスラエルのためになさったことを聞いて、エリコの住民は恐れていると伝え、彼女は「あなたがたの神、主は、上は天において、下は地において、神であられるからです」と言いました。イスラエルの神、主に対する信仰を告白したのです。彼女は、町の人々のようにただ恐怖に震えているだけでなく、神、主に頼ろうとしました。その信仰から、偵察の二人をかくまい、城壁の中にあった彼女の家の窓から二人をつり下ろし、逃がしました。

このように彼女の場合も、神、主に対する信仰を行いによって表したのです。そして、彼女は「その行いによって義と認められた」と言います。実際に、イスラエルがエリコの町に勝利し、町を聖絶したとき、ラハブと彼女の家族は救い出され、その後、イスラエルの中に加えられました。そしてなんと、マタイの福音書の 1 章にあるイエス・キリストの系図の中にラハブの名が記されているのです。

こうして、一つの反対の事例と二つの模範の例を挙げて、ヤコブはまとめます。26 節。人が生きているとき、「からだが霊を欠いて」いることはありえません。同じように、生きた信仰は「行いを欠いて」いることはありえないのです。ですから、行いとなって表れることがないなら、信仰が生きているかどうか、自らを顧みなさいとヤコブは言うのです。

最後に改めて確認しますが、24 節でヤコブが言っている「人は行いによって義と認めるのであって、信仰だけによるのではない」ということと、パウロが教えている「人は律法の行いとは関わりなく、信仰によって義と認められる」（ローマ 3：28）ということは対立し、矛盾しているかのように受け取られることがあります。しかし、そうではなく、パウロとヤコブはそれぞれ義認の原因と結果という異なる側面を教えているのです。すなわち、パウロは「どうすれば人は神に義と認められるのか」という点から教えました。一方、ヤコブは、「神に義と認められた結果、人はどう生きるのか」という点から教えたのです。

信仰は直接的には見えないものです。しかし、信仰者が何を考え、何を語り、そして何を行うかによって、信仰は見えてきます。そのように、信仰が行いによって表されると言われると、自分の不完全さに尻込みしそうになりますが、だからと言って、自分にはできないということを言い訳にすることがないように、また信仰が大事なのだから行いが不十分でも仕方ないと自分を納得させることがないようにと願います。

「私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです」。そして、主に喜ばれることを願っている者を、主は必ず助けてくださるのです。行いによって信仰を見せますと決意し、みことばを行うことを具体的に考えましょう。そして、主に拠り頼み、行動しましょう。